愛国学園大学人間文化研究紀要　第22号　1～12頁　2020年３月

〔論文〕

神社と日本人経営者の研究

木　村　清　司

1）はじめに

ハーバード大学経営大学院では現在、日本の研究が盛んである。経済大国でもない日本は中国にも追い越され、人口も減少し、給与所得者の平均所得は増加しないので結婚できない者が多い国である。こんな国がグローバル化の時代に先進国の大学で何故に研究対象になっているのかが重要である。日本は過去に1980年代、経済大国としてアメリカ国内の資産を大量に購入し、日本製品を全世界に輸出した。しかし、バブル経済の崩壊、平成不況、リーマンショック等により日本企業の経営は破綻した。この解決策を企業経営者の多くはハーバード大学経営大学院などの世界的に優秀であると評価されている経営大学院でMBA（経営学修士号）を取得した者に求めたのである。

企業経営の成功は経営者が数理的データ分析による意思決定により達成できるものではない。企業経営に失敗しないためには科学的理論以外に人間文化的な力が必要なのである。ヘンリー・ミンツバーグ（Henry Mintzberg）は経営者が必要なものとして、クラフト（経験）、アート（直観）、サイエンス（分析）の適度な総合力を要求している。企業経営に必要な経営者とはサイエンスに偏らないバランス感覚のある献身的な人材であると指摘している。[1)]

平成時代の日本企業は世界的環境の激変に対応できなくなり、経営破綻した企業が多く発生したのである。この失敗は問題解決の方法を外国のビジネスの模倣や外国人経営者の導入に求めたため起こったことである。成功した日本企業の経営者は日本の伝統文化による力と日本人特有の倫理観により問題を解決した。この代表的経営者が京セラの創業者、稲森和夫氏であり、彼が企業経営者として強く影響を受けたのは松下幸之助である。

稲盛は経営破綻した日本航空を官僚的経営によって2年8か月で再上場させた。これはアメーバ経営と呼ばれる管理手法で、基本は経営者と従業員が深い信頼関係で結ばれていることが絶対条件である。この信頼関係は稲盛の経営者としての人間性と経営能力によるものであり、日本人としての善悪の倫理観が根底に存在している。[2)]

日本人の倫理観は歴史的に神道、仏教、儒

教から成り立っている。これらのうち神道は日本固有の宗教であり外国人には難解な内容である。日本人は古代から現代まで「八百万の神」との関係で生活している。日本人の生活から生まれた神は強い力があり、生きる恵みを与え、生命を加護し、災いから守ってくれると信じている。神に感謝するために祭りや神社にお参りに行くのであり、神に認めてもらうために日本人は「清き明き心」で生活する。[3)]

日本人は悪いことを「きたない」と表現し、善いことを「きれい」と表現して、神様から罰を受けないために、きたない行為をしないように生活している。神道古典である古事記や日本書紀には神々を信じることと罰について記されている。これは日本人が共同体の平和と共同体全員の福祉のために尽力することを求めている。

日本の神様は日本人の生活の根本を支える力、あるいは不安を解消する力を有し、なおかつ神様と人間は一体になれる性質を持っている。そして人間が神様を崇敬することによって神様がより一層力を発揮し、またわれわれも神様によってご加護を受けるという相互依存の関係にある。この関係を示す神道では人間としての基本的な生き方を集団への奉仕と考えている。神道の一番の特色は、個人の救いというよりも、集団との関わりが強いことなのである。[4)]

神道は日本人の生活様式や風土によって存在し、仏教や儒教と影響しあいながら現在にいたっている。日本人の寛大な心が仏教やキリスト教と違い神道が他の神と共存する文化を作り上げているのである。第二次世界大戦の戦勝国が日本人に対し行った多くの日本弱体化政策に対しても寛容精神により受け入れて、占領支配から独立した。そして、戦後の日本人家庭では神棚があり、仏壇があり、クリスマスケーキを食べる生活を自然に行っている。

神道に欠かせない存在は神である。古事記（712年）は天武天皇の命令によって太安万侶が筆録した書物で、元明天皇に献上された。ここには「日本の国のおこり」「日本の国の成り立ち」が記述されている。天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）、高御産巣日神（たかみむすひのかみ）、神産巣日神（かみむすひのかみ）があらわれ、生成の霊力により、葦の芽のような植物的な「いのちの萌芽」があった。さらに、雌雄一対の神である、伊邪那岐命（いざなきのみこと）と伊邪那美命（いざなみのみこと）が誕生し、そののち伊邪那岐命は天照大御神に高天原を治めることを命じ、須佐之男命には海原を治めることを命じたのである。[5)]

神道は神々の神話をもとにして成り立ち、多くの流派や学派、教団を形成してきた。国学の四大人といわれる荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤らは「記紀二典」の神代巻を文献学的に研究して、神道の真髄を究明したのである。神道の流派・分類には伊勢神道、両部神道、吉田神道、山王神道、儒家神道、吉川神道、復古神道、国家神道、皇室神道、教派神道などがある。[6)]

神道は日本人の民俗信仰として、宗教、学問として発展してきた。国学や皇学という学問分野も樹立した。日本人が倫理観として神道から受ける力は大きく、この世で幸福になったり、目的を達成したり、最善の意思決定を選択したい時に「幸運」を願ったり、神の力

を信じる。神道では人間が幸福になるためには清く、正しく、美しく生きることを第一としている。

日本人は純粋であるという倫理観を大切にして生活しており、その清くとは重要な要素である。清くないものが濁った心であり、それは表裏が混在したり、不純物が混入したり、二心により他者を騙すことである。日本人は自分よりも他人のために尽くす倫理観を持っている。清くないと日本人は神様から見捨てられて不幸になる。自分が汚くなると、清めるために神社に行って神主に御祓いをしてもらう。自然の神の力で清める日本人が現在でもいるのである。

2）神社とは

日本にいる日本人が神社を知らなかったり、見たことがないという人はないと思う。新年には初詣で神社に参拝し、家族の健康や自分の安全を神様にお願いする。自分の住居周辺にはコンビニより神社の方が多いという人がいると思う。神社が多いので初詣に行く神社を選択するのに困ってしまう日本人も多いのである。今日は神が神社に定住し、私たちが神に会いに行くことになっている。本来、初詣では自分たちの氏族の神に詣でるのでなければならないものである。

自分の氏の神とは、出生後、約30日ぐらいの初宮詣で出会う。氏子としての認知を氏神から受けた後、生後3歳で髪を伸ばすことを開始する髪置、5歳の男が初めて袴を着用する袴着、7歳の女が初めて帯をつける帯解というように、成長を氏神に見届けてもらうのである。15歳になると、公家なら初冠、武士なら元服をして、氏神に対し、一族の大人としての任務を果たすことを誓うのである。

初詣とはめでたく一族全員が年をとれたことに感謝し、氏神に参ることである。氏神は邸内社である場合もあれば、地域開拓の氏祖として地域に祀られている場合もある。この考え方の延長が会社の屋上などに会社の神が祀られている場合もある。それは商家における邸内社が原型である場合が多いが、家族と同様とされる社員が幸せであるようにと祈って鎮祭されたものである。このように、日本人の暮らしと密着しているのが初詣である。[7)]

氏神の創設は律令制下の時代に行われている。平城京（710年）では氏の指導的立場にあった男性は官人として公務に従事するために、平城京の居住が義務づけられた。このため親族間の交わりから離れ、神々の場には遠くから間接的に関わるしかなくなった。平城京に移り住んだ人々は、共同体から遊離した個人となり、氏族や神々との一体感が失われていったのである。出身氏族の伝統的職掌とは無関係に官人が採用されることで、天皇と氏族の絆も薄れてきたのである。そこで、もう一度天皇との連帯感をとりもどし、官僚制のなかで安定した位置を確立したいという欲求が氏神の創設である。

律令制とともに出発した新興貴族の藤原氏には、氏として祀る神もなく、本拠地もなかったのである。平城京遷都後に藤原氏は神奈備山の神地に雷の神であるタケミカヅチを招き降ろし、宮都の安全と自分たちの繁栄を祈るために祭りを始めたのである。はじめは鹿島と香取の神だけを神地に招いていたが、やが

て河内の牧岡から中臣氏の祖神アメノコヤネも招いて併せて祭るようになった。768年には勅令で四神の神殿が造営されることになり、この時に神社である春日社が成立している。9世紀には春日社が藤原氏の守り神とみなされたのである。[8)]

各氏族では氏で祭っていた土地の神の信仰を土台に、父方の系譜的祖先を重ね合わせることによって、氏神を創出していったのである。この時期には賀茂社、平野社、八幡社、日枝社などの神社が成立している。

律令の細則である延喜式では、朝廷が祭を行う2861か所の神の社が記された延喜式神名帳がつくられている。そこに登録された神社は式内社と呼ばれ、国家的に認められた神社なのである。式内社には、朝廷の神祇官が担当する「官幣社」と国司が担当する「国幣社」とがある。現在、神社の名称や社号は「神宮」、「大神宮」、「宮」、「大社」、「社」になっている。

神宮とは、天照大御神など神話の中で重要な働きをした神様が祭られている神社に見られる社号となっている。延喜式神名帳には神宮号がついている神社は伊勢神宮、鹿島神宮、香取神宮の3社だけであるが、現在は3社のほかに明治神宮、平安神宮、熱田神宮、橿原神宮など24社がある。

大社は大国主神を祭る「出雲大社」のことを指すとされている。現在は春日大社、三嶋大社、多賀大社、熊野本宮大社、熊野那智大社、熊野速玉大社などがある。これらは国造りに関わった大国主神、伊邪那岐命、伊邪那美命などを祭る、広く人々の崇敬をあつめる神社のことである。

そもそも社は神様の屋代のことで、社号の上に付された名前が各神社の由来を表わしている。例えば「諏訪神社」は長野県の諏訪湖近くにある諏訪大社を総本社とする神社である。諏訪神社のほかに諏訪社など全国に約2700社がある。ご祭神は建御名方神で、狩猟、農耕の神様であり、人々から篤い信仰を集めていたのである。もともとは諏訪の土地の氏神で、やがて社領が各地に設けられ、五穀豊穣や武運長久のご神徳が得られる機能神となっていったのである。また、故人の遺徳を称える霊威神により神社を建てることもある。

邸内社には神社明細帳への記載がなく、ご祭神は個人が神様だと思う神様や人物を祭り自由に建てられたものである。地方の旧家などの敷地内や会社の屋上にある。[9)]

日本人が精神的、倫理的、政治的な文化として築きあげてきた神社を1945年12月に大東亜戦争の戦勝国側であるGHQが「神道指令」を発し、神社の理念は崩壊した。国家の管理を離れた神社は、宗教法人として再出発することになり、日本全国の神社を統括包括する宗教法人神社本庁が1946年2月に設立されたのである。この時の、神社本庁所属の神社は総数で87,218社である。GHQが期待したように日本人は神社と縁を切ることはできなかったのである。日本人の神様に対する認識はGHQには理解不能なものである。[10)]

日本人が現在、神社にお参りに行くのは初詣だけではないのである。人生の節目で神社の果たす役割は多く、この世で幸福に生活したいと願う日本人には神社が必要不可欠なのである。七五三とは11月15日に、三歳の男児と女児、五歳の男児、七歳の女児が晴れ着を着て産土神社に詣でる儀礼である。これは

江戸時代に、中国の元服の影響を受けて、男女三歳を髪置き、男児五歳を袴着、女児七歳を帯解きとして祝う習俗が普及し、これが七五三の原型となったのである。このように、神社が外来宗教や外来文化、外来の神の影響などにより、変化変容した時代もある。その代表的なことが「本地垂迹説」である。

仏教が日本に根づく過程で8世紀の奈良時代に、神と仏が融合した神仏習合という教えが生まれたのである。これは仏教の僧侶が神道を取り込み、仏教を広めるために唱えたものである。神社の近くには、神宮寺という寺が建立され、神前で読経や写経が行われたのである。8世紀の中頃には、日本の神々は仏教を守護する存在であるとする護法善神説が唱えられ、寺の境内に鎮守社が勧請され、寺の守護神とされたのである。東大寺には宇佐八幡宮が、法隆寺には龍田社が建立されたのである。[11)]

平安時代には仏や菩薩が日本の衆生を救うために、仮に日本の神に姿を変えて現われたとする本地垂迹説が唱えられるのである。これにより、神々には本来の姿としての仏や菩薩があてられ、目に見えない神が姿を現わすようになったのである。八幡神が阿弥陀如来になり、熱田神が大日如来になったのである。[12)]

日本古来の神が外来宗教に変容される状況を嘆いた、江戸時代の国学者は科学的研究により本来の日本独自の神道を樹立したのである。

3）ビジネスと神社

神社にはビジネス活動を守護する神様がいて、日本人はこの神様を敬い祭り、信仰することでビジネスを成功させてきたのである。日本人は運を尊重する民族である。運を与えてくれる神様に会うために神社に行くのである。日本の企業経営者には運を信じる人が多いのである。企業におけるビジネスはイノベーションが命である。日本人は高度な最新技術や世界にない新システムを発見し先進国として発展している。ここには神様の運による力が関係していることを否定することはできないのである。

酒造りの神として古くから信仰されているのは、奈良県桜井市の大神神社と京都市西京区の松尾大社である。大神神社に祭られている少名毘古那神は医薬の神としても知られているが、これは酒は薬であるとの考えによるものである。したがってこの神は酒造の神としても信仰されていたのである。大神神社では毎年11月14日に新酒の醸造安全祈願大祭を行っており、そのとき、拝殿に吊るされた杉の葉で作った玉が取り替えられる。酒造家は同じ杉玉を、新酒が完成した合図として店の軒先に吊るすのである。

松尾大社では、境内の奥にある延命長寿の湧き水が有名で、この水を醸造時に混ぜると酒が腐らないと言われている。このため、各地の酒蔵では「松尾様」という女神を祭っている。女人禁制の酒蔵が多いのは、女性が入ると松尾様が嫉妬して酒を腐らせてしまうという言い伝えがあるからである。

商売繁盛の神として有名な稲荷神は別名を宇迦之御魂大神という。稲荷神社の総本社は京都市伏見区の伏見稲荷大社である。その鎮座に関する縁起として、秦伊呂具という者が弓矢で餅の的を射ようとした際に、その餅が白鳥となって飛び去り、舞い降りた山の峰に稲が成ったという話を伝えている。この稲成りの物語が社名の起こりであり、和銅4年に、伊呂具がこの地に建立して神を祭ったとされている。

東京の銀座には、ビルの谷間やビルの敷地に組み込まれる形で、あるいはビルの屋上などに稲荷神社が点在している。有名なのは三越本店や松坂屋の屋上にあるもので、このようにデパートの屋上に神社が設置されているケースは少なくはないのである。[13)]

食品製造の神が磐鹿六雁命である。料理人の守護神であり、第十代崇神天皇のときに設けられた四道将軍の一人である大彦命の孫と伝えられている。景行天皇が安房の浮島の宮に行幸された際、侍臣の磐鹿六雁命が、弓の弦を取りに海に入れたところ堅魚を釣り上げ、また砂浜を歩いているとき、足に触れたものを探ると白蛤がとれた。これを天皇に差し上げたところ、大いに喜び、その料理の技を褒め称え、「膳大伴部」の姓を磐鹿六雁命に与えたのである。その子孫である高橋氏が、代々内膳司に任じられ、宮中の料理を司り、磐鹿六雁命は板前・料理屋の祖神として信仰されたのである。磐鹿六雁命を祭る主な神社は千葉県南房総市の高家神社、栃木県小山市の高橋神社などがある。[14)]

海運業の神様を祭る神社としては、住吉大社がある。大阪の住吉大社には海の底、中、表から生まれた底筒男（そこつつのお）、中筒男（なかつつのお）、表筒男（うわつつのお）の住吉三神が祭られている。三神は神功皇后の航海を安全に導いたことから、海上安全の神様として信仰されている。[15)]

日本人は稲作の生産活動から多くの職業を発生させてきた。米を運ぶ物流業から売る小売業、保管をする倉庫業、米相場の先物取引業、酒造業、土木業、機械業、米菓子業、その他、すべての職業に神様が存在し、これを祭る神社があるのである。日本ではビジネスと神社の関係は深いのである。

米の生産は日本人の最高の事業であり、神様が豊作をもたらすと信じている。国民のために天皇が神様に祈願するのが新嘗祭である。宮中では11月の卯の日に行われたが、新穀による御饌・斎酒を、賢所・皇霊殿・神殿に供え、さらに天皇が神嘉殿において新穀による御饌・斎酒を神とともに食することを主行事として行ったのである。[16)]

ビジネスには一般的な仕事もあれば特殊なものもある。特殊なビジネスほど神様に祈ることが真剣である。日本の水商売関係では、水ということで、水天宮にお参りに行く人が多い。水天宮には逆巻く水の嵐を乗り切るための神様がいると考えられているのである。また、堤防に穴ができず水の害が起きないという理由から穴守稲荷神社（東京都大田区）に参拝する職業の方も多い。

芸能関係のビジネスの人が進行している神社もある。京都市の車折神社境内にある芸能神社である。神様は天宇受売命であり、舞踊関係の職業から歌手やアイドルまで参拝に来る。この関係の神社には江島神社があり、多紀理比売命、市寸島比売命、田寸津比売命に由来するものである。また、西宮神社も芸能

関係の仕事の人が多く参拝する神社である。この神社は兵庫県西宮市社家町にあり、蛭子大神に由来するものである。

現在のビジネス社会は将来発生する現象を的確に当てなければならない仕事に従事している人が多い。毎日変動する外国為替や株式市場では、最先端科学を活用してビッグデータを処理しているが、満足した結果は得られていないのである。顧客に将来発生することを表現しなければならない職業は人間の能力を超えた世界である。人間は愚かにもこのようなビジネスを増やし、犠牲者は悲惨な状況で生活しているのである。

人間はギャンブルのようなビジネスが大好きである。当たるという快感は人間の本能であり、金銭を獲得し夢のような欲望が達成できるビジネスは魅力的である。人間の当てるという行為は努力や知力で達成できない、偶然の力が作用している。人生では偶然の力である奇跡を体験する。一般的人間は奇跡を信じるが、奇跡を期待してビジネスはしない。真面目に努力して誠意が相手に伝わるように仕事をするのである。

今日は世界中で仮想ビジネスが横行し、真実の実態が不透明になり、虚実が真としてすべての分野で発生している。このような複雑社会で仕事をする日本人には、当てる神様は重要である。この神社が神奈川県鎌倉市にある安倍晴明神社と京都市の晴明神社である。この神社には人の将来を当てる仕事をしている「占い師」も多く参拝している。[17)]

日本人はビジネスの成功を願って仕事の分野に該当する神社に参拝する。このような信仰は多くの神様を信じる日本人特有の文化であり、一神教の民族には理解できないものである。日本人が世界的ビジネスで成功するのは排斥的宗教観を強調しないからであり、平和的な民族だからである。神社に参拝するのは自分の幸福を願うだけではなく常に自分以外の人々の幸せを願っているのである。

4）神社と日本人経営者

日本人の企業経営者には神社に参拝に行く人が多いし、自社に神社を設置している企業も多い。日本人は稲作文化の共同体社会を構成して、弥生時代から今日まで生産の根幹を神道の信仰により発展してきたのであり、神道精神が日本人の企業経営に強い影響力を与えている。経営者と従業員が企業という共同体で仕事を行う行動原理は人の幸福と神への感謝で、神社の参拝で自分が神から守護される人間としての価値ある行動をしてきたかの「けじめ」をつけるのである。この精神が企業経営者に強くあるかどうかが重要なことである。

日本企業に祭られている神社は企業共同体の鎮守様であり、守護神である。これは、稲作文化で生活していた村落共同体の鎮守社と同じ役割と機能を持った神々であり、企業共同体の安全と繁栄を守ってもらう神々なのである。この企業の神々は会社の創業時や、工場あるいは新事業所が建てられたときに祭られたものが多く、その企業の神々は各会社の歴史とともに歩んできたのである。

企業神社の祭りは正月や会社の創立記念日、あるいは鎮斎した日に盛大に行われ、会社全体の大事な行事である。経営者以下幹部社員が参列し、なかには会社を休日にして、従業

員の家族と地域社会の人々や取引先などの人々を招待して行うところもある。この代表的神社がトヨタ自動車の豊興神社である。

トヨタ自動車の守護神は「トヨタ神社」と称される愛知県豊田市にある豊興神社のことであり、トヨタが創業された1925年に建立されたものである。この大企業の年頭始業は鉄の神様の金山比売、金山比古を祭る守護神・豊田神社への参拝という、日本的な儀式から始まる。この年頭行事は経営者と幹部社員が勢ぞろいして参列する中で、神主が祝詞をおごそかに奏上し、参拝者全員がトヨタの繁栄と安全を祈る。この神事は神社創建以来、毎年行われているのである。[18)]

トヨタ自動車の創業者は豊田喜一郎である。彼の経営の根幹は技術の自前主義と人づくり、改良と改善の継続努力である。彼が国産乗用車開発の構想を胸に準備を始めた昭和初年当時、一人の強敵がいた。その人は満州重工業の総裁であった鮎川義介である。日産グループを率いた鮎川は、アメリカのGMと提携し、生産工場を横浜にそっくり導入し、GM社の部品生産から自動車事業を開始したのである。喜一郎は鮎川のような海外技術依存に対して反対であった。これでは自前での国産車生産の技術が獲得できず、国産乗用車は完成しないからである。

鮎川が鋳鉄事業から自動車へと参入したように、自動車のエンジンのシリンダー製造には、より強度が高く、複雑な構造の高級鋳鉄生産技術は必須のものだった。通常の鋳物はキューポラという鉄の溶融施設で行うが、喜一郎はこれを電気炉でやろうとした。

喜一郎は電気炉導入の担当者を、工業高校を卒業したばかりの原田梅治にした。原田は熟練工の勘に頼る製法を変え、原料屑鉄の成分分析、シリコンの分析、溶融温度のデータ収集を重ねて高級鋳鉄の製造に成功したのである。これにより、初の国産乗用車AA型が完成した。自前豊田精神の誕生であり、これが今日まで継続しているから、世界のトヨタ自動車であり、ものづくり日本の中心企業である。

トヨタ生産方式といわれるジャスト・イン・タイムは喜一郎によって考え出されたものである。現在ではカンバン方式と呼ばれ、アメリカの自動車業界などではJIT（ジット）で通用している。この方式は製造業以外の分野にも浸透し、物流や情報システム等のオペレーションで広く活用されている。トヨタ方式は成功に溺れず、限界に挑み続けるという愚直な経営者の人間性から生まれたものである。[19)]

トヨタ自動車の経営には7つの黙示があり、トヨタ生産方式はこの考え方により構築されている。それは世界中で尊敬される存在になること、自分の城は自分で守ること、安全・安心・快適な車とクルマ社会を創造すること、元祖がいつまでも最強だとは限らないこと、現場から離れず自分の職務を全うすること、主役は部品メーカーかもしれない、改善に終わりはないということである。[20)]

社歴が長く日本を代表する企業の神社としては、三菱グループの守護神、土佐稲荷神社がある。一般的には「三菱稲荷」と呼ばれ、大阪西支店の屋上に社殿が建立され祭られている。これは江戸時代より土佐藩の屋敷内に鎮座していたものを、明治時代になってから藩の事業を継承して、岩崎弥太郎が三菱を創業したとき、あらためて岩崎の所有地に祭っ

たものである。西支店の祭りは、取引先の人々などが組織する「三菱稲荷後援会」の主催で、毎年2月の午（うま）の日に行われている。

岩崎弥太郎は1835年、土佐（高知県）生まれで、父は地下浪人であった。藩から地元対策として与えられた下級武士の格をすでに売却してしまった状態であり、極貧の家庭で育ったのである。母の実家は医者で、彼はそこから伯母が嫁いだ高知の儒学者である岡本寧浦の塾に入り、藩士の奥宮慥斎の従者となって江戸に出た。そして幕末の著名な学者の安積良斎の門に入ったのである。

弥太郎が切り盛りしていた藩営の開成館大坂出張所は1870年に「九十九商会」という新設の組織に移行したが、引き続き運営を担当した。この商会の事業内容は海運であり、藩から三隻の船を与えられ、船旗には山内家の三柏と岩崎家の三階菱の門を組み合わせた「三角菱」にしたのである。1873年には三川商会を三菱商会と改める、事業は主に海運である、船に掲げる旗は三菱である、三菱商会は純然たる独立した民間企業である、三菱商会は日本一の海運王をめざすというものである。

三菱商会は政府の台湾出兵や西南戦争などに際して、軍事輸送を大量に引き受けたことなどで大きく成長し、事実上の政府御用会社となったのである。しかし、三井が政府の支援を受けて海運会社を設立し、熾烈な競争が開始され、1885年に弥太郎は死去した。その後に三菱商会は日本郵船となったのである。[21)]

経営者としての弥太郎は、自分の藩での経験から、私利私欲がきたないものであり、民間の企業は公器であるから、人々への奉仕活動の精神が必要であると考えていた。日本人の倫理観である神様に対して、清く、正しく行動するから守護してくださいと願う神社参拝に共通するものがある。現在、日本郵船は日本最大の海運会社となり、島国日本の物流において国民生活を守る重要な役割を果たしているのである。

経営の神様と呼ばれている経営者が松下幸之助である。彼はパナソニックの創業者であり、会社の中に自前の神社を建立して社員の祈りの場としたのである。まず大正7年の会社設立時には、幸之助の生家でお祭りしていた「白龍大明神」を、昭和8年の本社移転とともに白龍大明神も移転し、昭和10年には分社した松下電工に黒龍大明神を、昭和11年には松下電器の電極工場に青龍大明神を、自転車工場に赤龍大明神を、豊崎工場に黄龍大明神をお祭りしたのである。現在、パナソニックグループでは守護神として、龍神様が100か所ほどお祭りされている。

パナソニックでは5色の龍神以外にも各事業所で、さまざまな龍神をお祭りしており毎月1回、守護神を拝む月例祭を行っている。幸之助は社長退任後に「根源社」という神社をモデルにした、独自の祈りの空間をつくり、感謝と素直を祈ったのである。根源社はパナソニック本社、PHP研究所、京都東山の別邸の3か所に建てられている。三重県の椿大神社には松下幸之助社というご本人を祭る神社まであり、本当に経営の神様になってしまったのである。[22)]

幸之助は明治27年に和歌山市で生まれている。家の事情で小学校を中退して丁稚として住み込み生活を開始し、次に船場淡路町の自転車販売店に15歳まで奉公する。この時

の日本は日露戦争後の重工業の発展期で、街には電灯が輝く環境変化が起こり、幸之助は電機の時代を直感して、大阪電灯会社に就職したのである。ここでは最初に内線工見習であったが熱心な仕事ぶりで配線工事担当に抜擢され、大正6年には検査員に昇格している。

仕事の無理から幸之助は病気になり、父と母が他界したり、結婚したり、生活環境が悪化する中で夜学に通って勉強するなど、多事多難の青春時代を経験している。大正6年の22歳の時には大阪電灯を退職して独立し、ソケット製造を開始した。昭和6年には無線部門に新規参入し、ラジオセットを生産している。この時期に企業の社会的責任が経営者の使命であると自覚するようになってきている。

幸之助は昭和7年5月5日に大阪の中央電気倶楽部に販売従業員200名を集めて、企業としての真の使命を明示している。これによると、宗教は精神的安心によって人生を幸福にする「聖なる事業」である。しかし、物質的豊富さも人間の幸福に、車の両輪として必要な「聖なる事業」である。貧を除き富をつくる仕事こそがわれわれの尊い使命であると明言している。[23)]

幸之助は太平洋戦争で大敗した軍部の指導者と、明治の45年間で日本を世界の5大強国にまで繁栄させた維新の元勲たちを比較している。両社の差違は現実認識の違いにあり、企業経営者は現実を認識できなくなると失敗すると指摘している。現実は日々変化するので学問や机上の研究では対応できない。塩と砂糖の違いは教科書を何回読んでも理解できないのである。実際に嘗めってみれば違いが理解できる。営業も同じことである。維新の元勲たちは、下級武士であり、現実を身をもって体験して理解している。太平洋戦争で大敗した軍の指導者は陸士・陸大、海兵・海大で戦争を演習で学び、現実を理解しないで失敗したのである。幸之助は現実を真に理解する努力を尊重し、その結果を神様に報告し幸福を願う企業経営を実践するために企業内に神社を建立している。

幸之助の経営は、素直な心で、私心にとらわれず、こだわりをなくして考えれば、正しいビジネスのあり方が見えてくると確信している。それは、自然の理法にかなったものであり、その事業は生成発展していくのである。幸之助が歩んだ真理の探究の道と企業経営の道とは重ね合わせることができる。[24)]

5）おわりに

神社と企業経営者の関係は強いものがあり、経営者が氏子になっている神社は多い。代表的な神社としては、伊勢神宮をはじめ明治神宮・日枝神社・大神神社・春日神社・賀茂別雷神社・石清水八幡宮・平安神宮・住吉大社・宗像大社・宇佐神宮などがあり自分の経営姿勢を正しく律する力としているのである。

日本の企業経営はものづくりを基本にして世界的に発展してきた。商品の種類が異なっても、これは不変であり、日本人の共同体文化の伝統でもある。ものづくりの神様を信仰する日本人が神社を参拝する行為は自然である。人間の限界まで自分が努力して、最後にけじめとして、神様に奇跡をお願いするときに、清き明き心がある人間になっていることが必要である。八百万の神の信仰が日本人に

運という奇跡の力を与えてくれるのである。企業経営者や仕事の指導者には、運が必要である。現実を理解する運のない人は人生を失敗するのである。人間として、きたない心で行動すると幸福にはなれないのである。個人データを悪用して膨大な利益を貪っている世界的企業が存在している。これらの企業に対して、法律により制裁しようと準備をしている国が増加している。

知的優位者が弱者を不幸にして、自分も不幸になる状況が世界中で蔓延している。資本主義経済体制でも社会主義体制でも同じことが発生している。科学技術が進歩して人間の生活は便利になった。これが人間の幸福であるかが問題である。

先進国の経営大学院では日本企業の経営が研究対象になっている。日本人と日本に魅力を感じているからである。しかし、日本の経営大学院ではアメリカの経営研究が盛んであり、難解な数学や応用物理学を利用した金融工学により生産した商品販売でリーマンショックが発生したことも忘れている。仮想通貨を販売している企業の経営者は被害者に対して責任を感じていないのかが問題である。

資本主義経済は自由市場と自己責任が基本原理である。企業経営者の正しい倫理観が絶対条件でもある。信用と信頼が経営者から消滅したら企業は存在できないのである。

引用文献

1）Henry Mintzberg（2004）（池村千秋訳『MBAが会社を滅ぼす』）日経BP社．pp12～23.
2）木村清司（2016）「経営教育の研究」『愛国学園大学人間文化研究紀要』第18号．p25.
3）安蘇谷正彦（2001）『現代の諸問題と神道』ぺりかん社．pp34～42.
4）安蘇谷・岡田（2006）『神道と日本文化』戎光祥出版．pp22～23.
5）阪本・石井（2011）『プレステップ新東学』弘文堂．pp12～15.
6）三橋健（2007）『神道の常識がわかる小事典』PHP研究所．pp87～114.
7）白山芳太郎（2009）『神道』国書刊行会．pp20～21.
8）井上順孝（1998）『神道・日本生まれの宗教システム』新曜社．pp78～79.
9）櫻井治男（2014）『日本人と神様』ポプラ社．pp79～87.
10）三橋健（2013）『神道・八百万の神々と日本人』河出書房新社．pp76～77.
11）三橋健（2007）『神社のしくみと慣習・作法』日本実業出版社．pp128～129.
12）茂木貞純（2014）『神道としきたり事典』PHP研究所．p22.
13）三橋健（2010）『神道と日本の神々』学研パブリッシング．pp160～178.
14）三橋・白山（2016）『日本神さま事典』大法輪閣．pp128～129.
15）茂木貞純（2019）『神社の教室』三才ブックス．p111.
16）伊藤・遠藤（2002）『日本史小百科神道』東京堂出版．p265.
17）増田秀光（2009）『神道の本』学習研究社．pp216～225.
18）菅田正昭（2008）『神道のすべて』日本文芸社．pp144～146.
19）大嶋賢洋（2016）『8人のカリスマ経営者』インフォビジュアル研究所．pp48～51.
20）日本経済新聞社（2005）『トヨタ式』日本経済新聞社．pp23～35.
21）日本経済新聞社（2009）『日本の経営者』日本経済新聞社．pp9～21.
22）八木龍平（2017）『成功している人は、なぜ神社に行くのか？』サンマーク出版．pp68～69.

23) 下川浩一・阪口昭（1980)『日本の企業家（4)』有斐閣．pp222～230.
24) 佐藤悌二郎（2009)『松下幸之助の行動学』東洋経済新報社．p162.